ロシア･東欧コース　ガイダンス資料

（教養学科　地域文化研究分科　ロシア・東欧研究コース）

マルク・シャガールが、ロシア帝国（現ベラルーシ）出身の画家であることをご存知ですか？ 上の絵「街の上の恋人たち」（1917）は、シャガールと恋人ベッラの魂の飛翔を描いたものです。ロシアでは、「重力からの解放」は、恋人たちだけのものではありません。ストラヴィンスキーのバレエ『火の鳥』からツィオルコフスキーの宇宙工学まで、あらゆる分野に、「より高くより遠く」というユートピア志向が見られるのです。

ロシアも東欧も、社会主義後、別の意味で「重力からの解放」を試み、現在まで多くの困難を抱えつつも、様々な道を模索してきました。試行錯誤を繰り返しつつ「より高くより遠い」地平を目指して歩むことは、21 世紀の日本にいる私たちにとっても無縁ではありません。

ロシア・東欧のカバーする領域は広大で、民族も国家も宗教も文化も多様性そのものです。取り上げることのできるテーマは無限にあり、言語・文学・思想から政治・経済・歴史にいたるまであらゆる研究テーマを選ぶことができます。多様な地域と分野がそのパイオニアの出現を待っています。

ロシア・東欧コースはこじんまりしたコースで、そのため、学生個々人の関心にあわせて、きめ細かく密度の高い教育体制を取ることができます。われわれスタッフは、世界の多様性に目を見開こうとする意欲溢れる学生諸君の進学を心待ちにしています。

ロシア・東欧コース　スタッフ一同　　2024 年 5 月

ロシア・東欧コースではどんな授業が開かれているか

開講科目や卒業論文題目などからもうかがえるように、ロシア・東欧コースは、ロシアと東欧のみを対象にしているわけではありません。旧ソ連邦に属していた地域、たとえばウクライナ、コーカサス諸国、中央アジアやシベリアも、その対象に含まれます。学べるジャンルは、文学、芸術、思想、宗教、政治、経済、歴史、社会、文化人類学など、広くかつ学際的です。

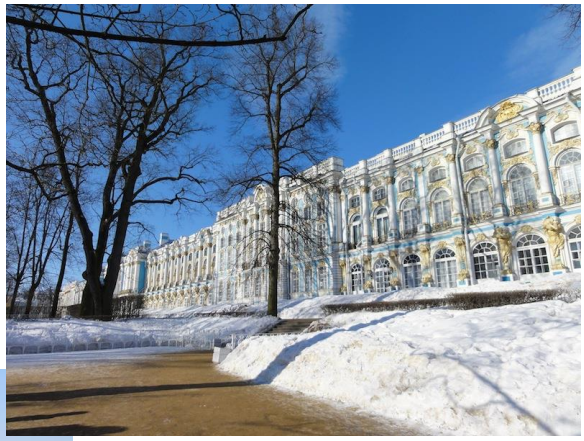
授業については、指導を行う専任スタッフ 3 名とロシア人教員を中心に、ロシア・東欧を専門とする他分科所属の専任教員の協力を得て、多様な科目を開講しています。非常勤講師の先生方のご協力に負う面も少なくありません。研究テーマによっては、卒論指導にもご協力をお願いしています。

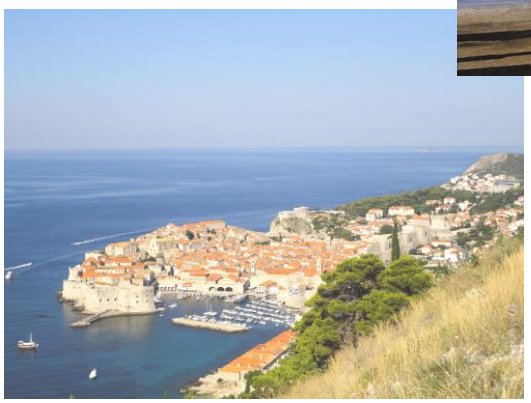
科目履修は、基本的には 3 年から始めればよいわけですが、実際には内定生段階でかなりの科目を履修しているケースが多く見うけられます。

また、ロシア語学習歴が浅い学生にはロシア語集中コースを特別に開くこともあります。

言語科目は、東スラヴ語群のロシア語（ネイティヴ・スピーカーの授業が約 4 割）以外に、南スラヴ語群のセルビア・クロアチア語、西スラヴ語群のポーランド語などが、1、2 年生向け三語と共通で開講されています。

特にロシア語は、会話、講読、作文などいくつもの授業があり、今までの卒業生は皆、これらの授業を通して、立派な卒業論文をロシア語で書く語学力を身につけています。しかも、その中には、内定生に決った 2 年次の後半にゼロからロシア語を始めた人も少なくありません。





ロシア東欧コース必修授業（一例）

黛秋津教授「ロシア東欧歴史論」

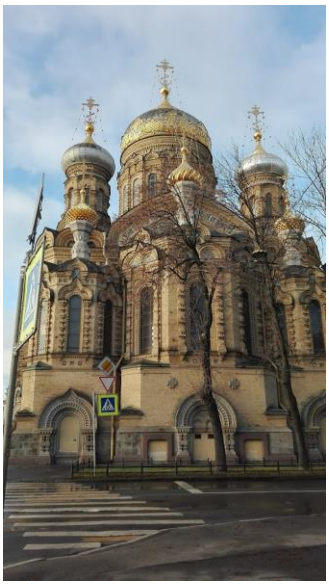
＜各回のテーマ＞
キエフルーシの成立とモンゴル支配下のルーシ
モスクワの台頭と発展
17 世紀ロマノフ朝の成立とロシア帝国の拡大
ピョートル 1 世の近代化とその後
オスマン帝国支配下のバルカン
「女帝の時代」のロシア
18 世紀のバルカンとロシアのバルカン進出
ウィーン体制の中のロシア帝国
ロシアと「東方問題」
帝政末期ロシアの政治と社会
ロシア革命

浜田華練准教授「ロシア東欧文学テクスト分析（ロシア文学と宗教）」

＜授業内容＞
初回授業で、ロシア文学史とロシア宗教史の概説を行う。二回目以降、実際のテキストを読みながら、その都度文学史的・宗教史的観点からの解説を加える。取り上げるテキストとしては、トルストイ『三人の隠者』『戦争と平和』、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』、『アヴァークム伝』、および「銀の時代」の詩などを予定している。

鶴見太郎准教授「ロシア東欧政治社会論」

＜各回のテーマ＞
ロシア帝国と民族
ソ連体制と民族
映画『ワレサ―連帯の男』鑑賞
体制転換と経済―ポーランドとロシア
共産圏崩壊と民族紛争―チェチェンとユーゴスラビア
現代ロシアの政治と外交
現代ロシアの社会と宗教
冷戦後の東欧国際関係―ウクライナとベラルーシ
歴史問題―バルト三国
ロシア東欧としてのイスラエル
ディアスポラのロシア人－イスラエル、アメリカ、ヨーロッパ



ロシア・東欧コース　授業担当スタッフ紹介

【専任教員】

鶴見 太郎　准教授

ロシア東欧近現代史、歴史社会学、ユダヤ人、現代イスラエル;『イスラエルの起源』(単著)講談社、『ロシア・シオニズムの想像力』(単著)東大出版会、*Publishing in Tsarist Russia*(共編著)Bloomsbury、*From Europe's East to the Middle East: Israel's Russian and Polish Lineages*(共編著)University of Pennsylvania Press、*Bounded Mind and Soul: Russia and Israel, 1880–2010*(共著)Slavica Publishers、"Jewish Liberal, Russian Conservative: Daniel Pasmanik between Zionism and the Anti-Bolshevik White Movement," *Jewish Social Studies* 21(1), 2015 など。

浜田　華練　准教授

東方キリスト教思想、アルメニア教会史、コーカサス地域研究;『一なるキリスト・一なる教会: ビザンツと十字軍の狭間のアルメニア教会神学』(単著)知泉書館、『東方キリスト教諸教会 ： 研究案内と基礎データ』(共著)明石書店、*Cross-Cultural Exchange in the Byzantine World, c.300–c.1500*(共著)Peter Lang Ltd, International Academic Publishers など。

黛　秋津　教授

近世・近代バルカン史、黒海地域史、国際関係史;『三つの世界の狭間で――西欧・ロシア・オスマンとワラキア・モルドヴァ問題』(単著)名古屋大学出版会、『講義ウクライナの歴史』(編著)山川出版社、『カフカース――二つの文明が交差する境界』(共著)彩流社、『ルーマニアを知るための 60 章』(共著)明石書店、『宗主権の世界史』(共著)名古屋大学出版会、『黒海地域の国際関係』(共著)名古屋大学出版会など。

【協力教員】

鳥山　祐介　教授

18–19 世紀ロシア文学・ロシア文化史;『〈超越性〉と〈生〉の接続―近現代ロシア思想史の批判的再構築に向けて』(共著)水声社、『18 世紀ロシア文学の諸相:ロシアと西欧　伝統と革新』(共著)水声社、オーランドー・ファイジズ『ナターシャの踊り』(共訳)白水社、*Publishing in Tsarist Russia: A History of Print Media from Enlightenment to Revolution*(共著)Bloomsbury、Карамзин – писатель: коллективная монография(共著)Издательство «Пушкинский Дом» 、""Английский сад" как метафора в сочинениях Н.М. Карамзина", *Russian Literature* 75(1–4) , 2014 など。

乗松　亨平　教授

ロシア文学・思想;『リアリズムの条件――ロシア近代文学の成立と植民地表象』(単著)水声社、『ロシアあるいは対立の亡霊――「第二世界」のポストモダン』(単著)講談社選書メチエ、ヤンポリスキー『デーモンと迷宮――ダイアグラム・デフォルメ・ミメーシス』(共訳)水声社、トルストイ『コサック――1852 年のコーカサス物語』(翻訳)光文社古典新訳文庫など。

渡邊　日日　教授

文化人類学、シベリア民族学、ロシア社会思想史;『社会の探究としての民族誌』(単著)三元社、『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界』(共編著)風響社、『リスクの人類学』(共著)世界思想社、『多言語主義再考』(共著)三元社、『ポスト社会主義人類学の射程』(共著)国立民族学博物館、『新・国際社会学』(共著)名古屋大学出版会、『現代人類学のプラクシス』(共著)有斐閣、*The Siberian World*(共著)Routledge など。

【外国人教員】

グレチュコ・ワレリー　特任准教授

ロシア文学・文化;『ロシア文化の方舟』(共編著)東洋書店、Русская литературно-художественная критика в Грузии. 1918–1922(編著)Белград: Логос、Между утопией и Realpolitik: Мapp, Сталин и вопрос о всемирном языке, Russian Linguistics 34 (2), 2010、Несовершенство как прием: стратегии и функции деградации субъекта, Russian Literature 109/110, 2019、『ロシア人が日本人によく聞く 100 の質問』(共著)三修社、『ロシア語スピーキング』(共著)三修社、『ハルムスの世界』(共訳)ヴィレッジブックス、『犬の心臓・運命の卵』(共訳)新潮社など。

【非常勤講師】

坂庭　淳史	ロシア文化
安達　祐子	現代ロシア経済
田中　壮泰	ポーランド文学
安野　直	ロシア文学・ジェンダー論
中田　瑞穂	現代中東欧政治
浜　由樹子	ロシア政治思想史

【教務補佐員】

畔柳　千明	中露関係史

学生の声

ロシア・東欧コースに進学した学生さんのコメントを紹介します。

大場啓生さん（2023 年度進学）

もともとロシア語やポーランド語などのスラヴ系言語を趣味で齧っていたこと、高校生のときサマースクールでポーランドを訪れた経験、ロシアの文化芸術への憧れなどからこのコースに進学しました。とはいえ、最初からこの地域に強いこだわりを持って進学してくる人ばかりではありません。所属が決まってからロシア語を始めた人もいます。

このコースは分野の縛りがなく、これまでの卒論や（院生を含む）現在籍生の専門を見ても、内容は人文・社会科学を中心に多岐に渡り、地域面でも中東欧やカフカースから中央アジア・極東に至るまで様々です。専任の先生方のご専門を見てもこの分野的・地域的多様性は明らかでしょう。またコース専任以外にも、協力教員などの形で、この地域の文学・思想・文化人類学などをご専門とされる先生方が多く駒場にいらっしゃるので、授業履修や個人的な相談などで関わりを持ちやすいのも魅力です。

授業の雰囲気については、少人数のものが多いためかなり濃密な指導を受けられます。とりわけ語学の授業はネイティヴの先生方と徹底的にコミュニケーション（会話のみならず、作文の添削なども）もできますし、教材も各学生の希望に合わせたものを選んでくださるので、必要単位数が多いこともあってかなり鍛えられると思います。

また８号館にあるコース室では、分野も言語も様々な書籍に囲まれながら、コース所属の学部生・院生が集っています。人数が少ない分会話も生まれやすく人間関係も良好で、お茶を片手に雑談をしたり作業をしたり、カジュアルに研究の相談をしたりしています。教務補佐の方も週２日いらっしゃって相談に乗ってくださいます。

総じて、扱える守備範囲の広さと受けられるサポートの手厚さ、ゆったりとした雰囲気とが魅力のコースだと思います。駒場の（少なくともそれなりに）リベラルな空気の中で、ユーラシアのこの広範な地域のなにがしかを研究したいという人には、このコースで学ぶ２年間は意義あるものになるでしょう。

坂間遥さん（2020 年度進学）

入学当初は何となく経済学部や法学部を志望していたもののロシア語や文学以上に魅力を感じられるものに出会えず、かといって文学部に進む踏ん切りも付かず…そんな私にとって、ロシア東欧関係のことなら何でもできる本コースは非常に魅力的でした。実際、進学して良かったと思っています。
ロシア語の講義は心ゆくまでとれ、確実に語学力は鍛えられます。また、ロシア東欧、旧ソ連地域に関する講義は幅広く、知的好奇心が刺激されます。

そして何よりの魅力は、少人数で、先生や大学院生との距離が非常に近いことです。学科室で先輩方の話を聞くだけでも刺激的ですし、先生方からはきめ細やかな指導を受けられます。怠惰な性分の私ですが、このような環境に奮起されながら、マイペースにやっております。
未だ自分の興味が定まらない方、ロシア東欧の研究をバリバリしたい方、どなたにもおすすめできるコースです。

坂口あんずさん（2019 年度進学）

第二外国語の授業が楽しくて、ロシアの文化についてさらに知りたいと思いこのコースに進学しました。ロシア文学に興味があったものの、２年夏の段階では具体的に何を勉強したいのかは全く定まっていませんでした。いまパンフレットを読んでいる皆さんのなかにも同じような方がいるかもしれません。

ロシア・東欧コースでは、政治、社会、歴史、文学などなど幅広い分野の授業が開講されています。しかも対象地域が広範で興味がつきることはありません。大きく異なるテーマの授業を受けていて、先生方のお話に何かしらのつながりが見えたときのおもしろさは、この学科ならではのものではないでしょうか。少人数制なので授業にはかなり柔軟性がありますし、先生方や院生の方々との距離が近いため色々と相談したり興味深いお話を聞いたりできます。空き時間に８号館４階のこじんまりした学生室に行くと、いつも誰かが机に向かっていて、お菓子をつまみつつ勉強や雑談をしています。

また、現地で勉強したいという学生には留学の機会もあります。私は３年生の秋にモスクワのロシア国立人文大学に留学しました。日常的にロシア語の飛び交う環境で授業を受けながら生活した７ヶ月間は本当に貴重なものでした。

２年前は「卒業論文をロシア語で書く」という言葉に怖気づいていましたが、手厚いサポート体制の下みっちりロシア語の授業を受けている今(卒業までに必要な言語科目の単位は 22 以上！) 、なんとかなりそうだという気持ちが強くなっています。このコースは、やりたいことが明確に決まっている人、そうでない人、どちらにとっても恵まれている環境であること間違いなしです。

卒業生たちはどんな論文を書いているか？（近年の卒業論文の例）

・「ソルジェニーツィン「アンズ・ジャム」における手紙」
・「ロシア正教会の聖歌における西欧の影響」
・「体制転換期の農業保護政策」
・「「女の涙は何か？」レールモントフ『仮面舞踏会』におけるジェンダー規範と逸脱 」
・「ボスニア紛争後のスルプスカ共和国におけるアイデンティティ――加害性と被害性に着目して」
・「帝政末期からソ連初期におけるベラルーシ語形成」
・「モスクワ数学派の活動における宗教的・政治的要素の役割」
・「モスクワ市営地下鉄の都市における役割の変遷――スターリン期からフルシチョフ期まで」
・「なぜトルクメン女性はコイネクを着るのか」
・「ドイツ人「追放」問題への異論派的とりくみ」
・「コソボ紛争後のロシアの、国際社会およびチェチェン共和国との関係における戦略」
・「ファジリ・イスカンデル『チークの物語』に対する幾つかの考察」
・「ユーゴスラヴィア解体期クロアチアにおける第二次世界大戦の記憶の想起」
・「ロシア食文化とそのアイデンティティ」
・「北方領土問題による「国境」地域の社会的変動について」
・「セルビアにおける民主化の限界について：国民意識の観点から」
・「ミロシェヴィッチによるコソヴォの歴史の政治利用について―ガジメスタン演説を中心に」
・「ミラン・クンデラの小説『冗談』における喜劇的側面について」
・「P.I.チャイコフスキーのオペラ『マゼーパ』」
・「マルシャークの創作―子供たちのための真の芸術」
・「特筆すべきグルージン」
・「革命後の農業構造」
・「ヴルーベリ『真珠貝』」
・「N.A.バイコフ『偉大なる王』」
・「ソ連対日参戦の背景」
・「経済体制移行期における企業構造について」
・「2000 年代のボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける EU 加盟プロセス」
・「ユーロ導入をめぐる経緯と東欧諸国の現状」
・「ロシア連邦における教育改革のための情報通信技術(ICT)の活用」
・「コソヴォ紛争の再検討」
・「衣服から身体へ：1920 年代ソヴィエトの『新しい人間』像」
・「ロシア郵便史」
・「多民族国家ロシアと民族問題」
・「幻想小説『吸血鬼』に見る A・K・トルストイの手法」
・「カザフスタン外交と国際組織」
・「ネットコミュニケーションと社会の日露比較」
・「アルメニア使徒教会とロシア正教会の関係及び典礼の比較研究」
・「国民教育とハンガリー・アイデンティティの形成」
・「東欧におけるエスペラントの歴史」
・「緩衝国家のナショナリズム」
・「イスマイル・カダレの時空間」
・「17 世紀中葉から 19 世紀末までのザバイカリエおよびアムールにおけるコサックの変遷史」
・「ヤーシ・オスカールとハンガリー社会」
・「シンボルスカの詩におけるエクフレーシス」
・「ユーリ・ノルシュテインの『話の話』における 2.5 次元の空間」
・「現代ロシアにおける出生率の低下」
・「サンボの歴史」
・「サハリン資源開発の社会への影響」
・「中央アジアの国境画定」
・「タルコフスキーの『惑星ソラリス』論」
・「ナゴルノ・カラバフの民族問題」
・「戦間期のルーマニアの国民統合」
・「『カラマーゾフの兄弟』の自然観」
・「20 世紀のロシアのユダヤ人問題―ベイリス事件」
・「戦争と平和におけるナターシャの象徴的意義」
・「ハルムスにおける『戸棚』の象徴性と世界観」
・「ロシア文化としてのチェス」
・「ハンガリーにおけるＥＣ問題」
・「ソ連における航空機開発」
・「ヴィソツキー論」
・「ドストエフスキー『虐げられた人々』」
・「喜びと哀しみの庭――ソクーロフ論」

卒業生（175 名）の進路

分　野	計	備　考
教員	19	うち大学教員 18 名
民間企業	52	三菱自動車、住友化学、NTT ドコモ、三井物産、日本郵便、ジャストシステム、大和証券など
大学院など	37	地域、表象、文化人類、言語情報、人文スラブ、公共政策など
マスコミ	14	朝日、読売、毎日、共同、時事、NHK、TBS、講談社など
官公庁	10	うち外務省 4 名
銀行	8	みずほ銀行、三菱 UFJ 銀行、三井住友銀行など
研究所	6	野村総研、富士総研など
その他	29	国際交流基金、JICA など

ロシア・東欧留学事情

ロシアおよびウクライナなど旧ソ連……1989 年、日本のロシア研究者にとって長年の念願であった日ソ政府間初の給費留学制度が発足しました。

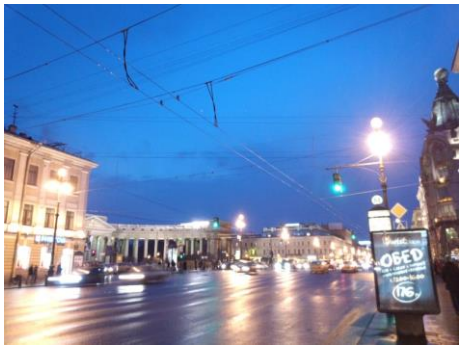
日本からは、89 年の第 1 期生から、ソ連崩壊後の混乱で中断があったもののその後再開され、各期 20–30 名の院生および学部生が、モスクワ大学、ペテルブルグ大学、プーシキン大学、モスクワ国立教育大学、エカテリンブルグ大学等に留学しました。ロシア・東欧コース在学生のなかからも、このロシア政府国費奨学金制度を利用して留学する者が多くおり、その数は既に 10 名近くになっています。

対象者は、ソ連において研究可能な分野を専攻する学生、大学院生、若い研究者であり、ロシア語の十分な能力をもつ者。期間は原則として 1 年。一定の奨学金が支給されます。その他、98 年春にはモスクワ大学ならびにロシア国立人文大学と、12 年からはペテルブルグ大学と東京大学の間に学術交流協定が締結され、留学の可能性がまた広がりました。

東欧……東欧のうちポーランドに関しては、東大とワルシャワ大学のあいだに交流協定があり、過去 20 年にわたり教授者、研究者の交流が活発に行なわれています。この一環として学部生、院生の留学は随時可能であり、現在までロシア・東欧科から多数の留学生を出しています。

その他の国々に関しては、各国で研究分野によって DESK など種々の奨学金制度が設けられています。また、各大学と直接交渉し自費で留学することも可能です。

留学体験者の声として、2013 年 2 月から 1 年間、ペテルブルク大学に留学した石井優貴さんの留学記を紹介します。



ロシアへの留学について

こんにちは、石井優貴と申します。私は 2012 年 4 月に（当時の名称で）ロシア・東欧地域文化研究分科へ進学し、3 年（2012 年度）冬の授業を履修し終えた直後の 2 月から、サンクトペテルブルク大学の歴史学部へ一年間の留学をしました。

・概要、留学を決めた理由

私は東大入学当初は理系の学生だったのですが、第二外国語として選択したロシア語の学習を通じてロシア文化の魅力に惹かれ始め、それが高じてロシア東欧科へ進学することとなりました。後期教養学部で学ぶうちに大学院への進学を考えるようになり、自分の語学力や文化に関する知識の不足に不満を感じていた 3 年生の夏頃、先生から留学の話を持ちかけていただいてロシア行きを決断しました。

私が利用したプログラムは東大の全学交換留学で、私たちはこの制度でペテルブルクへ留学する第 1 期生でした。私の場合、東大の 4 年生に当たる 1 年間を丸々ロシアで過ごしたため 1 年留年することになりましたが、例えば 3 年生の夏学期終了時から 1 年間留学をすれば 4 年生の夏に日本へ帰ってくることができるので、その後に院試受験や就活をすれば、4 年で卒業することも可能だと思います。半年間だけ留学するプログラムを選ぶこともできました。

・授業や大学について

2012 年当時の交換留学の規定では、留学先の学部で 1 コマ 90 分の授業を週 10 コマまで履修できると決められていました。そのうちの 4 コマを留学生向けロシア語の授業に振り替えるオプションがあり、私はそちらを選択して、語学も含めて週 8 コマから 9 コマ分に相当する授業を履修していました。

歴史学部には外国人向けの履修コースは無く、私は留学期間中ずっとロシア語で行われるロシア人学生向けの授業に混ざって勉強していました（留学生向けに英語の授業が開講されている学部もあります）。初めのころは、授業を聞いていても全く理解できないという経験もしましたし、試験期間は精神的に追い詰められましたし、他にも色々と苦労はしましたが、何事も最後まで食らいついていけば何とかなるということを学んだ気はします。

もちろん、大学では他の学生と交流する機会もあり、例えば歴史学部では、学期の初めに留学生を交えた学生同士の交流会がありました。そこで知り合った学生からホームパーティに誘ってもらい、ソ連映画よろしくロシア美女が奏でるギターを伴奏に『カチューシャ』を歌ったり、ネヴァ川の美しい夜景をバックに皆でウォトカを飲んだり、なんてこともありましたね。また、ペテルブルク大学には日本語を勉強している学生が意外に沢山いるのですが、彼らは心なしか言動や趣味が日本人学生と似ており、会う機会があればすぐに仲良くなれるのではないかと思います。

・生活について

ペテルブルク市内には大学の寮がいくつかあり、私もそのうちの一つに住んでいました。留学前に、ロシアの学生寮は不便だ、不潔だなどと散々脅されていたのですが、実際に行ってみると案外綺麗です。部屋は 1 つの個室に 2,3 人が暮らす形態で、キッチンやトイレが数部屋ごとに 1 つあります。ルームメイト達の出身地は旧ソ連圏、中国、西ヨーロッパ、南米と様々で、生活習慣も性格も全く違う人間達が一緒に暮らすことになります。そのため、深夜の騒音やゴミの捨て忘れといった極めて下らない原因から人間関係に亀裂が入ったりもしますが、終わってみれば良い思い出です。

生活に必要なものは殆ど寮の近所で買いそろえることができ、東京での暮らしと比べてもそれほど不便には感じません。24 時間営業のスーパーが徒歩圏内に二軒もあったので、夜型人間にも優しいです。

・文化について

ロシアの文化に触れるためには、ペテルブルクは絶好の街です。演劇やバレエの広告が街中のいたるところに溢れかえっていて、チケットが安く且つお手軽に買えるため、興味が無い人でも「ちょっと観に行ってみようかな」という気分になると思います。音楽ホールも沢山あり、日本で実演を聴く機会はまずないような、珍しいロシア・プログラムの演奏会が頻繁に開かれています。市内のあちこちに大小様々な書店があり、目当ての本を探して店をハシゴするだけでも楽しいです。美術館や博物館の入場料が安い、あるいは学生無料なのも素敵ですね。

・留学後の感想

私自身は、もともと自分の専門分野を決めきれないまま留学した、履修していた授業が全て学部生向けのものだった、自分の力では授業を理解し課題をこなすだけで精一杯だった、などの理由から、留学を通じて専門的な知識を多く得られたわけではありません。もう少し準備をしてから留学に入るべきだったかな、と思うこともしばしばです。しかし、駒場の修士課程に進学した今になって改めて思い出されるのですが、ペテルブルクで思いがけなく学んだことや、お世話になった先生から伺った話、あるいは書店で偶然手にとって買ってみた本が、帰国後に卒論を執筆し、自分の専門分野を決めていく上で大きな役割を果たしてくれたような気がしています。（2015 年 4 月）